DAIHATSU

DAIHATSU MOTOR CO., LTD.

DX REPORT 2025

人にやさしい みんなのデジタル

現場から始まったデジタルの輪が、全社の力になった一年。

ダイハツは、DX を単なる IT 導入ではなく、一人ひとりが自らデジタルを活用し、
仕事とお客様へ還元する価値をよりよいものに変えていく活動として進めてきました。
本レポートでは、2025 年度に生まれた成果や、各種ツールの全社展開における取り組みをまとめています。

DX ビジョン

**デジタル技術の活用により社会課題を解決し、
お客様の豊かな生活と従業員の幸せを追求**

編集方針
本レポートは、当社の DX に関する考え方と取り組みを、お取引先・お客様をはじめとするステークホルダーの皆さまにお伝えするために発行しています。対象期間は 2025 年度で、一部に前後の取り組みを含みます。
将来見通しに関する注記：将来に関する記述は発行時点で入手可能な情報に基づく見通しであり、事業環境の変化などにより実際の結果と異なる場合があります。

DX 推進室　デジタル変革 G ｜ 発行：2026 年

CONTENTS

全 7 章・14 ページで、2025 年度の DX の取り組みを体系的にご紹介します。

01｜2025 年のハイライト

認定更新・人材 1,000 名・ロードマップ・生成 AI の成果

02｜目指す姿、DX の全体戦略

目指す姿と、実現に向けた DX・IT ロードマップ

03｜推進体制と人材定義について

経営と現場をつなぐ推進体制、人材の役割と育成

04｜コミュニティ活動と情報発信

学びと実践を広げるコミュニティ、社内外への発信

05｜産学連携

大学との連携を通じた学びと取り組み

06｜AI 活用

製造現場が自ら改善を回す、工場向け AI の実践

07｜ツール展開（生成 AI / BI / Power Platform）

生成 AI・BI・Power Platform を現場へ展開

MESSAGE

本レポートの発行にあたって

この一年、多くの仲間がそれぞれの職場でデジタル活用に挑戦し、小さな改善や新しい価値づくりに取り組んでくれました。まずは、その一つひとつの行動に心から感謝したいと思います。

DX は特別な部署だけが進めるものではありません。現場で働く一人ひとりが、「もっと良くできるのではないか」と考え、行動することから始まります。

私たちが目指しているのは、単なるデジタル化ではなく、人と組織が学び続け、自ら変化できる文化をつくることです。完璧な計画や正解を待つのではなく、小さく始め、試し、学び、その成果を仲間と共有する。その積み重ねが、大きな変革につながると信じています。

生成 AI をはじめとする新しい技術が急速に進化する今だからこそ、挑戦する人を増やし、知識や経験を組織全体の力へ変えていきたいと思います。これからも「データと AI の民主化」を通じて、一人ひとりが活躍できる環境を広げ、ダイハツらしい DX を皆さんと共に前へ進めていきます。

ダイハツ工業株式会社
DX 推進室 デジタル変革グループ長
（兼）DX 戦略担当

太古 無限



01 | 2025 年のハイライト

2025年度、ダイハツのDXは「構想」から「全社実装」へと大きく前進しました。

DX・IT ロードマップの策定、DX 人材 1,000 人の達成、DX 認定の更新、生成 AI 活用の本格展開など、2025 年度は DX 推進の基盤が大きく前進した 1 年となりました。人材育成や環境整備を進めてきたこれまでの取り組みが、現場での実践や活用へと広がり、デジタルがより身近なものになりつつあります。ダイハツは、デジタルを現場の業務改善につなげ、一人ひとりがデジタルを活用できる組織づくりを進めています。

CERTIFICATION

DX 認定 更新

経済産業省の DX 認定を更新。デジタルによる経営変革を継続する基盤を、あらためて確かなものにしました。

HUMAN CAPITAL



DX 人材 1,000人 達成

全社のデジタル活用を担う DX 人材が 1,000 人に到達。現場主導で変革を進める実行力が広がりました。

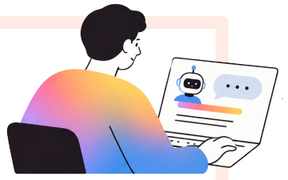
DX / IT ROADMAP

DX・IT ロードマップ策定

DX ビジョンの実現に向け、提供価値と組織の変革を共通マイルストーンで進める道筋を具体化しました。



GENERATIVE AI

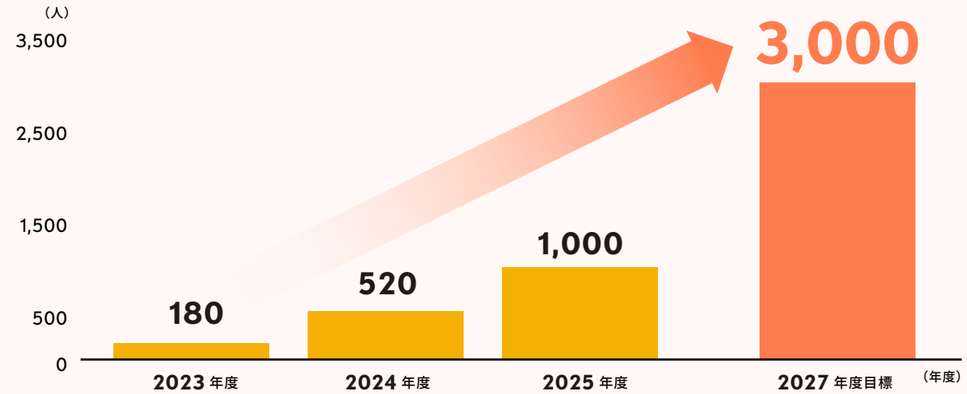


生成 AI 活用を本格化

全社での利用と部門展開を進め、生成 AI を日常業務の改善へ。活用を広げる段階へ移行しました。

DX 人材の状況

DX 人材育成目標を早期達成、2027 年度末には 3,000 人へ



社外表彰・受賞

社外から 7 つの評価を獲得

- 1 月 Forbes Japan CIO Award 2024-25 チェンジレガシー賞
- 2 月 JAPAN HR DX AWARDS 優秀賞
- 7 月 第 3 回 日本ノーコード大賞 優秀賞
- 9 月 日本の人事部 HR アワード 入賞
- 10 月 全国ワークスタイル変革大賞・近畿大会 最優秀賞
- 12 月 日本デジタルトランスフォーメーション 推進協会 CIO30 Awards 特別賞


全国ワークスタイル変革大賞・近畿大会



CIO30 Awards 特別賞

Forbes Japan CIO Award 2024-25



第 3 回 日本ノーコード大賞

出典：社内資料「取り組み全体像」

02 | 目指す姿、DX の全体戦略

目指す姿　人にやさしい　みんなのデジタル

人にやさしい
みんなのデジタル
デジタル技術の活用により社会課題を解決し、
お客様の豊かな生活と従業員の幸せを追求

【モノづくり】
お客様の生活に寄り添うクルマづくり

【コトづくり】
お客様の生活を支えるサービスの提供

【ヒトづくり】
働き方改革による従業員のエンゲージメント向上

3つの取り組み

DX1	DX2	DX3
デジタルを広める	今を強くする	未来を作る
デジタルを活用した効率化・生産性の向上	お客様ニーズに応える商品・業務プロセスの強化	お客様とデータで繋がり新たな価値を産み出す

5つの基盤

データ・IT基盤 / 技術	情報セキュリティ	デジタル人材・組織	データドリブンな意思決定	マインド意識改革

ビジョンを実装へつなぐ「3 つの取り組み」と「5 つの基盤」

DX 推進の戦略として「モノづくり」「コトづくり」「ヒトづくり」の 3 つをテーマに、DX1・DX2・DX3 の 3 本柱をボトムアップとトップダウンの両輪でアジャイルに取り組み、お客様との繋がりを深め、さらに少子高齢化や地域活性化等の社会課題の解決にも取り組みます。

DX・ITロードマップ　DXビジョンの実現へ



各事業部主体で推進する「モノづくり」「コトづくり」における取組みと、
DX 推進部主体の「人をつなげる」「データをつなげる」「組織をつなげる」という組織変革により、
ダイハツの目指すデジタル化を推進。全社的な競争力強化を推進。

ロードマップの基本思想

2つの変革を、共通マイルストーンで進める

提供価値の変革	2つの変革	組織の変革
各事業部主体の「モノづくり」「コトづくり」		DX推進部による人・データ・組織をつなぐ変革

マイルストーン

❶ 種まき・基礎固め期	❷ 変革過渡期	❸ New ダイハツらしさ
	2028年	2030年
DX人材	生産性	2030年
1,000名 → 3,000名	DX（AI）・ITで30%向上	データドリブン組織・経営

主要テーマ　人材育成／部門間連携・共有／全社データ基盤／製品・モビリティ DX ／レガシー刷新／生成 AI ／法規認証・営業業務・生産現場 DX

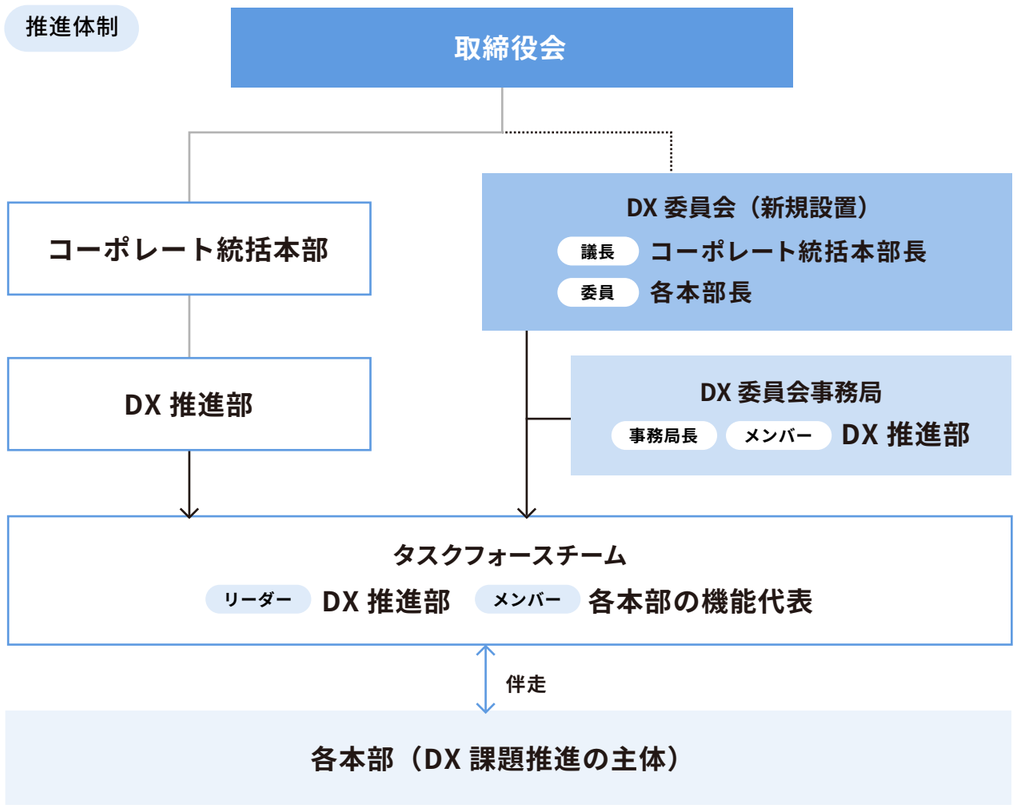
出典：社内資料「DX・IT ロードマップ」

03 | 推進体制と人材定義について

推進体制　学びを、実装と横展開へ

DXを続く変化にするのは、
熱意ではなく、進め方のしくみです。

DX 委員会では、各本部のアクションプランや DX 推進指標の自己診断に加え、生成 AI、人材育成、ロードマップなどの重要テーマについて議論し、全社として優先すべき取り組みを決定しています。委員会で決定した方針は、事務局である DX 推進室を通じて各本部へ展開され、現場での具体的な取り組みへとつながります。一方、各本部ではアクションプランの進捗や現場で見えてきた課題を整理し、次回の DX 委員会でフィードバックします。経営と現場が同じ視点で課題を共有し、改善を繰り返す。このしくみが、ダイハツの DX 推進を支える基盤となっています。



人材定義　デジタル技術を使いこなせる人材へ

全社員の基礎から専門領域の実装・先導者まで、
7段階で成長を可視化。



● 7 段階の DX 人材モデル

AI 人材 / BI 人材 / アプリ開発人材	匠 TAKUMI	Lv.7	デジタルとビジネスを融合し、社会に新たな価値や潮流を生み出す DX の先導者
	牽引者 Leader	Lv.6	デジタルを活用して、組織や事業の変革を主導し成果を出し続ける人材
	専門家 Specialist	Lv.5	専門領域で DX を実践し、指導や育成を通じて組織の変革力を高める人材
	実務者 Practitioner	Lv.4	デジタル技術を業務に実装し、効率化や業務変革を自ら実行できる DX 人材
	「Lv.4 ／実務者」以上をダイハツ DX 人材として認定		
ビジネス人材	活用者 User	Lv.3	デジタルを業務で活用し、DX 施策に主体的に参画できる人材
	学習者 Learner	Lv.2	デジタルの基礎を理解し、業務での活用に向けて学びを進める人材
	入門者 Starter	Lv.1	デジタル社会の基礎を理解し、DX に向けた学習を始めた段階の人材

● 育成体系　学びを実務成果へつなぐ 4 ステップ

01	02	03	04
共通基礎	専門教育	実装・事例化	認定・横展開
IT リテラシー	AI / BI / アプリ	現場課題で実装	共有・次世代育成

出典：DX 人材定義・育成体系（社内資料）

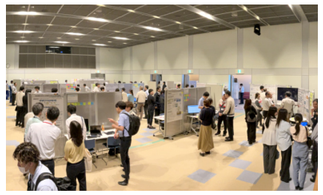
04｜コミュニティ活動と情報発信

Community&PR　学びと実践を、全社へ広げる

イベント開催、インタビューを通じて、挑戦する人・応援する人をつなぎます。

コミュニティの広がり

第 7 回
DX 活用事例共有会



25年度｜1回開催

累計7回

年に 1 度のリアルイベント。社内外の優れた DX 事例を展示・発表。直接の意見交換を通じて、部署を越えた DX の広がりを創出しています。

社内定期
DX イベント

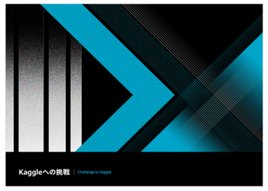
Camp DAIHATSU
DAIHATSU DXSALON

25年度｜19回開催

累計66回

社内限定で定期開催している DX イベント。各回約 200~350 人の社員が参加します。社外ゲストの講演や社内 DX 事例の共有、部署を越えた交流の場を創出しています。

社内
Kaggle コンペ



25年度｜4回開催

累計22回

現場の実データを題材に社内コンペを開催。探索・前処理・モデル構築・評価までを競い合いながら実践し、学びを業務に還元しています。

情報発信でつながる DX の輪

社内報連載企画



隔月発行の社内報にて、デジタル人材を紹介する企画をスタート。身近なロールモデルを増やし、次の一歩を後押しします。

DX 事例冊子



各部署・拠点単位で DX 事例を紹介し、冊子としてまとめています。
2025 年度は滋賀第 1 工場、第 2 工場分を HP に掲載しました。

05｜産学連携

産学連携　次世代のDX人材を育む

2025年は5つの大学と連携。現場のデータと課題を教材に、収集から分析・モデル化・発表までを学生と実践しました。

● 2025 年度に連携した大学｜5 大学・6 講義

A大学	**走行データを計測し、BI ツールで燃費改善を分析・実証** 学部 1〜2 年｜15 名｜5 日 ×240 分｜2019 年〜　＋打音検査の短期版（2 日 ×300 分・学部 4 年 12 名）
B大学	**走行データを Python で可視化し、ビジネスアイデアを立案** 学部 3 年｜90 名｜2 日 ×90 分｜2020 年〜
C大学	**打音検査を題材に、収集からモデル作成・評価までを 14 回で実践** 学部 2 年｜15〜20 名｜14 日 ×90 分｜2021 年〜
D大学	**ディープラーニングの実務活用事例を紹介し、研究の価値を伝える** 修士 1 年｜50〜60 名｜1 日 ×90 分｜2021 年〜
E大学	**アンケート分析でクルマの魅力を提案。生産現場の見学も実施** 学部 1 年｜10 名｜2 日 ×100 分｜2023 年〜

※大学名は匿名（A〜E）で記載。対象学年・人数・時間は 2025 年度の実施実績。

成果　学びが、採用と現場のつながりに



2025 年度に
連携した大学数
5大学

年間の
受講学生数
約190人

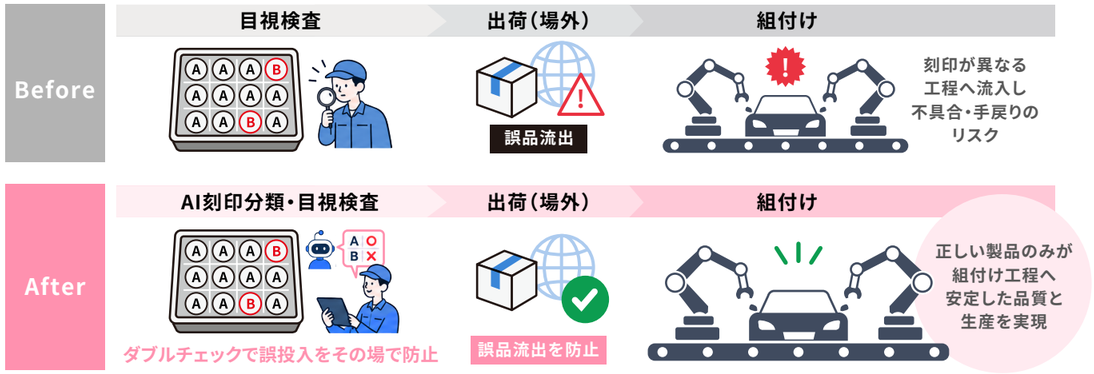
06 | ＡＩ活用

現場が自らつくる、市民開発の広がり

現場に寄り添い、AI活用のキーパーソンを育成。
AIを特別な技術から、現場の日常へ。

AI の導入そのものではなく、現場が自ら課題を見つけ、技術を活用し、改善を続けられる組織づくりを進めています。人材育成や実践機会の提供を通じて、AI を作れる人、使える人を増やしていきます。

One example AI の刻印判定で、刻印違い品の流出を防ぐ



従来は作業者が目視で確認していた製品の刻印を、AI によって自動判定する仕組みを導入。
ダブルチェックによって刻印違いを検知し、誤品の流出防止につなげています。

- **育成体系**

AI 人材育成と定着のしくみ

01 基礎研修
02 実践型教育
03 伴走支援
04 コミュニティ

成果 育成の広がり

AI 人材の
認定人数
（2025 年度）
計361人

製造部向け AI
ブートキャンプ
修了者
計60人

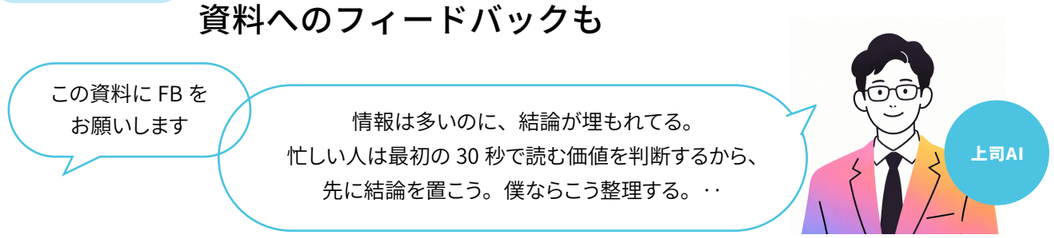
07 | ツール展開（生成 AI / BI / Power Platform）

生成AI 誰もが使える日常の道具へ

安全な利用環境と学びの機会を整え、
個人の効率化から業務プロセスの高度化へ。

2024 年 3 月、安全に利用できる生成 AI 環境「D-AI-hatsu Assistant」を全社公開しました。説明会や勉強会などを通じて活用を広げるとともに、社内ナレッジを活用した RAG や Microsoft 365 Copilot を展開し、業務効率化と生産性向上を推進しています。

One example 上司の考えを学習した AI と壁打ち！
資料へのフィードバックも



活用を広げるしくみと組織の取り組み

部署別勉強会
2025 年度の
1年間で
73回

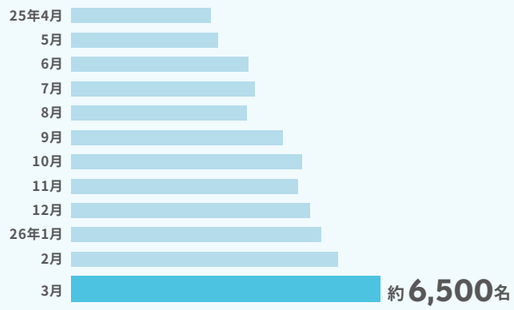
全社への普及
全社員の 9 割が
日常的に
活用する状態へ。

部署別
RAG PoC
社内規定・
設計資料など
180件

重点業務の高度化
社内情報の
検索時間を短縮し、
生産性向上へ。
Copilot 普及で
さらなる加速も。

生成 AI 利用者数の推移

4月時点で約3,000人だった生成AI利用者数が、3月には約6,500人となり、倍増する結果となりました。



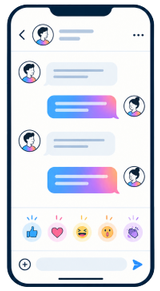
BI 判断を変える「共通言語」へ

データを見える化するだけでなく、データから課題をみつけ、自らデータを深堀りし、改善する力を育てる。

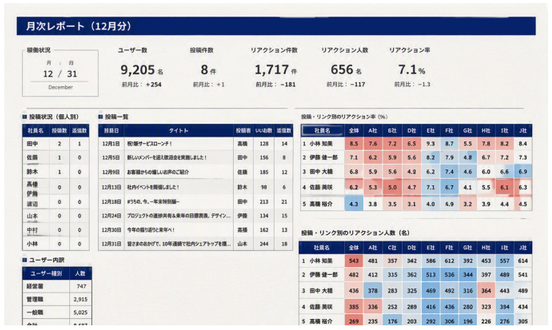
2022 年、経営層向けの BI 体験会を皮切りに展開をスタート。研修や相談会の開催、伴走型の事例づくり・共有、コミュニティ活動を組み合わせ、データから課題を見つけ、自ら分析し、改善を実行できる人材を育成しています。

One example 「社内コミュニティ」の反応を、施策の改善へ

社内SNSの投稿画面



投稿・返信・リアクションを毎日自動集計し、月次で可視化



手作業で全投稿・反応を調査した場合の削減試算

4,000 時間

社員の反応を可視化し、満足度向上施策のための検討材料に。

Power Platform 現場の「こうしたい」を、実現

日々現場で感じている困りごとを、PowerPlatformの『アプリ化・自動化・見える化』で素早く解消。

2023 年のコミュニティ立ち上げから、相談・伴走・勉強会へと活動を拡大してきました。業務を最もよく知る現場が、「こうしたい」と思っていることをデジタルを駆使して実現、改善のスピードを高め、変化にも柔軟に対応できるよう取り組んでいます。

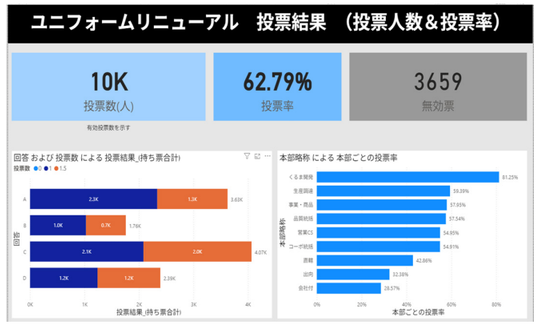
One example ユニフォーム刷新にあたり、諸作業を見える化・効率化

ダイハツの新ユニフォームに関する投票結果を PowerAutomate で自動集計し、集計結果を PowerBI でリアルタイムに見える化した事例。
集計にかかる手作業工数を削減し、削減効果は約 68 時間となりました。

削減効果

68 時間

投票結果ダッシュボード



展開を支える人材と組織のしくみ

育成した BI 人材
25 年度 3 月末時点
309人

研修・勉強会の開催
62 回

学びを、実務の成果へつなぐ循環

研修・育成	伴走	共有
活用手段と操作方法を知る	**業務の活用事例をつくる**	**実業務の活用事例を社内に共有**
月2回ハンズオンを開催。初心者・中級者向けとレベルにあわせて講座を準備。	相談窓口を設け、質問や相談ができる機会の開催・情報発信を行い、テーマ・相談案件を見つける。	事例を社内で広く共有し、活用した部署や社員の功績を評価・表彰して、データ活用の機運を高める。

持続的な改善活動のしくみ

現場の改善の種を収集し、その実現に向けたしくみ・体制を構築しました。このサイクルにより、DX 推進組織が協力し、現場任せにせず、持続可能な改善活動につながっています。

現場改善サイクル



事例集アプリ(みせる・つなげる仕組み)

